

カイラル指数, 及び巻き付き数について

塩崎 謙

October 20, 2022

1

一般に, 異なる既約表現間で, カイラルリティを比較する方法は, ない. 例えば, "total chirality"などは, 定義できない場合もある. この点についてまとめる.

群を $G = G_0 + \Gamma G_0$ とする. G_0 の既約表現 α に対して, $\Gamma\alpha \sim \alpha$ とする. すると, 一般論より, $G_0 + \Gamma G_0$ の既約表現 α_{\pm} であって,

$$\chi_{g \in G_0}^{\alpha_{\pm}} = \chi_g^{\alpha}, \quad \chi_{g \in \Gamma G_0}^{\alpha_{\pm}} = -\chi_g^{\alpha} \quad (1)$$

を満たすものが存在する. α_+ と α_- を $G_0 + \Gamma G_0$ の既約表現から選ぶ標準的な方法はないことに注意する.

1 カイラル指数

α_+, α_- を固定したとき, カイラル指数は

$$\#(\alpha_+ \text{ irreps}) - \#(\alpha_- \text{ irreps}) = \frac{1}{|G_0 + \Gamma G_0|} \sum_{g \in G_0 + \Gamma G_0} (\chi_g^{\alpha_+} - \chi_g^{\alpha_-})^* \text{tr}[u_g] = \frac{1}{|G_0|} \sum_{g \in \Gamma G_0} (\chi_g^{\alpha_+})^* \text{tr}[u_g] \quad (2)$$

と定義される. ここで, u_g は表現行列であり,

$$P_{\alpha_{\pm}} = \frac{1}{|G_0 + \Gamma G_0|} \sum_{g \in G_0 + \Gamma G_0} (\chi_g^{\alpha_{\pm}})^* u_g \quad (3)$$

は既約表現 α_{\pm} への射影である.

G_0 の別の既約表現 β が存在し, $\Gamma\beta \sim \beta$ とする. このとき, 既約表現 β_+ を $G_0 + \Gamma G_0$ の既約表現の集合から選ぶことにより, β セクターの正のカイラルリティが定まる. α セクターの正のカイラルリティ α_+ とは一般には無関係であることに注意する.

部分群 $H \subset G$ に対して, H がカイラル対称性を有する場合を考える. $H = H_0 + \Gamma H_0$. H_0 の既約表現 γ に対して, $\Gamma\gamma \sim \gamma$ とする. すると, γ セクターの正のカイラルリティが, $H_0 + \Gamma H_0$ の既約表現から γ_+ を選ぶことにより定まる.

α_+, β_+ は $G_0 + \Gamma G_0$ の既約表現なので, 部分群 $H_0 + \Gamma H_0$ の既約表現である γ_{\pm} と内積を取ることができる. 部分群 H に制限したときの α_+ のカイラル指数の変化が以下で与えられる.

$$(\gamma_+, \alpha_+) - (\gamma_-, \alpha_+) = \frac{1}{|H_0|} \sum_{g \in \Gamma H_0} (\chi_g^{\gamma_+})^* \chi_g^{\alpha_+}. \quad (4)$$

この変化が有限値である場合は, カイラル指数の変化を通して, α_+ と β_+ の正のカイラルリティを比較することができる.

"total chirality" が定義できない例は, $G = \mathbb{Z}_4 = \{e, \sigma^2\} + \sigma\{e, \sigma^2\}$ の場合. このとき, カイラル演算子を含むような G の意味のある部分群が存在しない.

¹ (動機) AHSS の第一微分 $d_1^{p, -n}$ において, 奇数の n については, カイラル演算子のため, 群元を 2 倍に拡張する必要があるが, なんとか群元を増やさずに第一微分の計算ができないだろうか? 結論は, 異なるセクター間のカイラルリティを比較する方法は一般には存在しないので, 群元を 2 倍にすることは避けられない.

2 巻き付き数

空間 $2n-1$ 次元のパラメータ空間に依存したハミルトニアン $H(\mathbf{k})$ が群 $G_0 + \Gamma G_0$ の以下の対称性を有するとする。

$$u_g H(\mathbf{k}) u_g^{-1} = \begin{cases} H(\mathbf{k}) & (g \in G_0), \\ -H(\mathbf{k}) & (g \in \Gamma G_0). \end{cases} \quad (5)$$

G_0 の既約表現 α に対して、マップされた表現 $\Gamma\alpha$ がユニタリ同値 $\Gamma\alpha \sim \alpha$ であれば、整数値に値を取る巻き付き数が定義できる。既約表現 α の群 $G_0 + \Gamma G_0$ への拡張 α_{\pm} を固定する。巻き付き数は以下で定義される。

$$W_{2n-1}^{\alpha} = \frac{n!}{(2\pi i)^n (2n)!} \int \text{tr} [(H^{-1} dH)^{2n-1} (P_{\alpha+} - P_{\alpha-})] \quad (6)$$

$$= \frac{n!}{(2\pi i)^n (2n)!} \int \frac{1}{|G_0|} \sum_{g \in \Gamma G_0} (\chi_g^{\alpha+})^* \text{tr} [(H^{-1} dH)^{2n-1} u_g] \in \mathbb{Z}. \quad (7)$$

注意として、この定義では α の表現次元によらず、 W_{2n-1}^{α} の取る値は任意の整数値である。

最も簡単な例は $G_0 + \Gamma G_0 = \{e\} + \{\gamma\}$ の場合で、 $u_{\gamma}^2 = 1$ なる乗数系の場合は、表現の拡張は $\chi_{\gamma} = \pm 1$ の2通り存在する。 $\chi_{\gamma}^{\pm} = \pm 1$ とすると、巻き付き数は

$$W_{2n-1}^{\alpha} = \frac{n!}{(2\pi i)^n (2n)!} \int \text{tr} [(H^{-1} dH)^{2n-1} u_{\gamma}] \quad (8)$$

となり、既存の定義に一致する。

非自明な例を挙げる。

$$G_0 + \Gamma G_0 = \{e, m_x, m_y, c_z\} + \{\gamma, m_x \gamma, m_y \gamma, c_z \gamma\} \quad (9)$$

として、

$$u_{m_x}^2 = u_{m_y}^2 = u_{c_z}^2 = -1, \quad (10)$$

$$u_{m_x} u_{m_y} = -u_{m_y} u_{m_x}, \quad (11)$$

$$u_{\gamma} u_{m_x} = -u_{m_x} u_{\gamma}, \quad u_{\gamma} u_{m_y} = u_{m_y} u_{\gamma}, \quad (12)$$

$$u_{\gamma}^2 = 1, \quad u_{m_y \gamma} = u_{m_y} u_{\gamma}, \quad (13)$$

の場合を考える。 G_0 の既約表現は唯一であり、

$$\chi_g \begin{vmatrix} e & m_x & m_y & c_z \\ 2 & 0 & 0 & 0 \end{vmatrix}. \quad (14)$$

この既約表現の $G_0 + \Gamma G_0$ への拡張は、 $u_{m_y \gamma}$ が他の全てと可換であることと、 $u_{m_y \gamma}^2 = u_{m_y}^2 u_{\gamma}^2 = -1$ に注意すると、

$$\chi_g^{\pm} \begin{vmatrix} e & m_x & m_y & c_z & \gamma & m_x \gamma & m_y \gamma & c_z \gamma \\ 2 & 0 & 0 & 0 & 0 & 0 & \pm 2i & 0 \end{vmatrix}. \quad (15)$$

巻き付き数は、

$$W_{2n-1}^{\alpha} = \frac{n!}{(2\pi i)^n (2n)!} \int \frac{1}{|G_0|} \sum_{g \in \{\gamma, m_x \gamma, m_y \gamma, c_z \gamma\}} (\chi_g^{\alpha+})^* \text{tr} [(H^{-1} dH)^{2n-1} u_g] \quad (16)$$

$$= \frac{n!}{(2\pi i)^n (2n)!} \int \frac{1}{4} (2i)^* \text{tr} [(H^{-1} dH)^{2n-1} u_{m_y \gamma}] \quad (17)$$

となる。空間1次元の模型例は

$$H(k) = \sin k\tau_x + \cos k\tau_y, \quad (18)$$

$$u_{m_x} = i\sigma_x, \quad u_{m_y} = i\sigma_y, \quad u_{\gamma} = \sigma_y \tau_z. \quad (19)$$

このとき, $u_{m_y\gamma} = i\tau_z$ であるから,

$$W_1 = \frac{1}{4\pi i} \oint \frac{-i}{2} \text{tr} [(\sin k\tau_x + \cos k\tau_y)(\cos k\tau_x - \sin k\tau_y)(i\tau_z)] dk = -1 \quad (20)$$

となる.